



村民4人が米国漂流

「あまり知られていないからこそ、ライフワークになった」。自著をおもむろに手にする山田哲夫さん(ハニ)田原市田原町

水平線が丸みを帯びながら延び、浜に荒波が押し寄せる太平洋。幕末に「渥美版のジョン万次郎」と言われる米国漂流記の舞台と

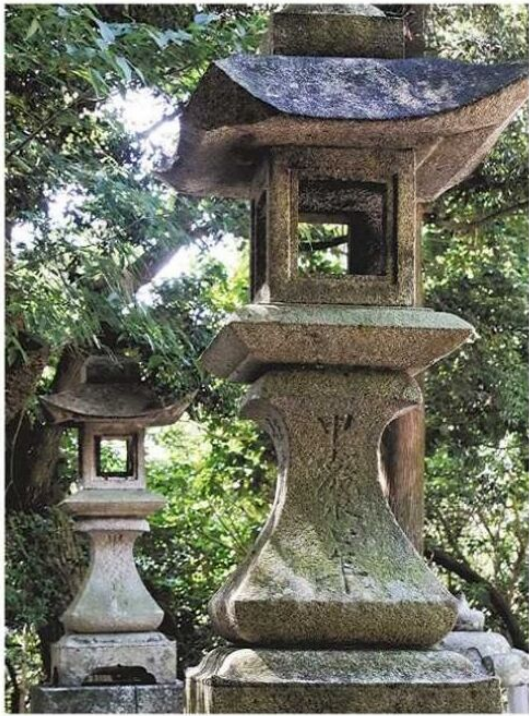
久丸事件」研究の第一人者になった。時代にも米国に行った人たちがいたとは

事件をまとめた専門書がほとんど存在しなかったことが、探究心に火を付けた。高校の国語教員を務める傍ら、帰国した四人の村民の話をもとめた古文書「漂流聞書」の口語訳に着手。取り組むうちに、遭難当時の天候や潮流、流され

た場所の様子など詳細をもっと知りたくなった。四人が立ち寄った地を巡り、関係資料の収集に夢中になった。先に帰国した二人の生還を祝った常夜灯が住吉神社(同市江比間町)に残されていることを知り、足を運んだ。静岡県下田市や長崎県対馬市のほか、米ハワイにも出向き、現地の図書館で事件当時の新聞記事を発見。そして五十七歳だった九五年、事件の概要をまとめた著書「風

濤の果て」を仕上げた。解説の難しい古文書を文字起こしする市の調査員を務める今も、事件の研究を続けている。新たに村人が帰国直前に立ち寄った香港の関係資料を見つけた。「結構な年になったけど、元気でやれているのは永久丸事件への興味があってこそ。生きがいなんだ」。四人の航跡をたどる山田さんの旅は、しばらく終わりをうけない。

文と写真・鈴木弘人



岩吉と善吉が江比間村に生還したことを記念して建立された2つの常夜灯。いずれも「嘉永七年」と彫られている。田原市江比間町の住吉神社で

③ 永久丸事件



「事件の調査が生きがい」と話す山田さん。田原市田原町で



永久丸事件 1851年12月、江比間港(現泉港)を出港した永久丸が冬の黒潮に乗り、小笠原諸島近海まで流され、85日間漂流。米捕鯨船のアイザック・ハウランド号に救助された。永久丸には岩吉(62)、善吉(40)、作蔵(21)、勇次郎(21)が乗っていた。4人はハワイまで運ばれ、岩吉と善吉はすぐに帰国。作蔵と勇次郎の2人は捕鯨船の母港の米ニューベッドフォードに渡り、カリフォルニアや香港などを經由し故郷に戻った。後に2人は田原藩の洋船「順心丸」に乗り、藩士として活躍した。